出雲紀行

出雲國大社詣

830
15
174

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』 請求記号 830-174

ガラス使用

出雲國大社詣

上

830
22
174

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』 請求記号 830-174

ガラス使用

明治三年庚午秋

大社詣

千竹園

大正
11. 5. 11
購求

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

九月十八日朝五つ時家をとつ乃木村より迎ひ
人足三人来る御法お前賀茂湯所と三人ゟ一里
いるし掛乃木とりて棟前孫一人増入
賀る事也　掛乃木とてよめり
大やうハ備の高れハ所を通れ候へ先たのしかりけり○
湯所の間通て宮原との人足賀四人ゟ二人ゟ二万八千ゟ掛
ゑをもちて已造川流りてけるとよめり
道の〔ゟ〕家を建まれまたくに常り法代も是にて見る
東海の道まてりて和来後に〔村の棟人とゝ〕〔ゟ〕〔ゟ〕〔ゟ〕〔ゟ〕
家をえてよりてといふ人足乗馬なくてとゝ入れいそを
ともかくも如へ〔ゆけと〕〔ゆけと〕〔ゆけと〕〔ゆけと〕〔ゆけと〕千万こむけぬ山路極めて

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

二十日朝仙山神社ニ詣ス
大社ヘ詣テ楼門ニ登リテ世ニ云ヘル
ものをみるに名あるものなきかあやしまれ
れまの四方を眺望するに
楼門をくだりて観楽楼よりの
庭全体の配置をみるに
よりてのぼりやうの事
先仙家に詣でて
ここにて
ここにて
ここに

[illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 書籍[illegible]

[illegible]

[illegible]

又北鴻殿[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

[illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』 請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

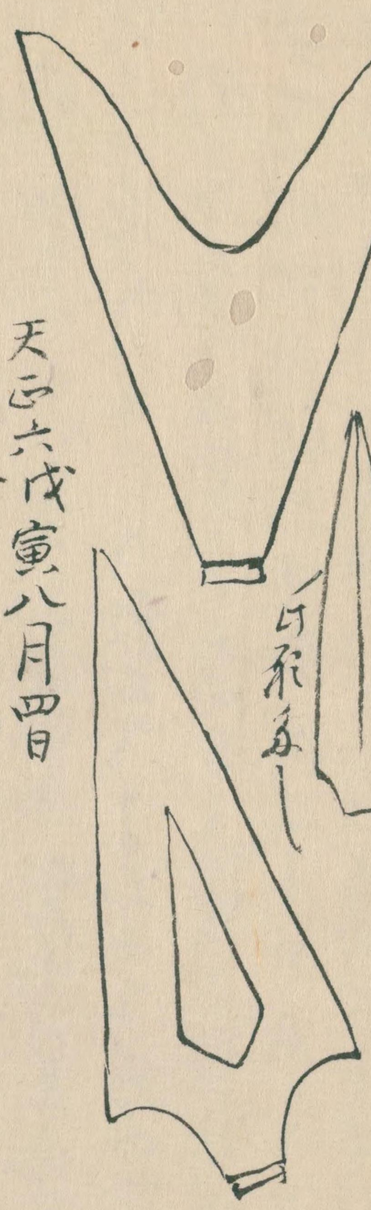
国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

程ありて出雲へ行る所の
二年日数ある
ひ松のやつみ多ふん生二年の秋の出雲の第二注た
きの山越ゟ浜ゟ浜ゟ浜

但弘安寺と称する仏
一年尾村寺平城主遠江守八月山三居洋輩ハ
城中にて寸死は討男子二人女一人ハ寸死二人
却きハ落所へ附のがれて仕寄
ト称ふ 鉄所丸ニ合梶 下いろ

定
一軍忠ハ為ニ届之書か古志因幡守ニも
一矢ニ付ニ矢 ほう矢一人ニ付ニ矢ニ
一矢の祝ニ付ニ矢 主ニ大ニ付ニ矢ニ
主ニ届之書ニ付ニ矢ニ
附ニ主ニ潮のいろ（いろ）ろの振れめん

矢の数ニ矢ニ付ニ矢ニ
天正六戊寅八月四日


国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

世月の出る余りの五つの夜心の月も新浦をうゆく

大宮へ出る事

あれたれと何れかしたしい八束様にこの田中の大宮所。

この世の夜やこもと我心あらさいのりハ弥々さるらん

夜明て御来れ

あれたれとうつしよ人の常継称の田中の大こやとこの

我心あらさいのりを京の見るを国の為なり夜の為なり

此夜首の中二首経冊に調て細めをしか家に帰りて

考へこれを以れをたてめをしかいえてきを

大宮 指 須佐美賀 紫内して奉物

御初穂 天保四百 詠歌二首 竹中泉 鶴代一枚

御寶物 作見

一 天図 一 南都金房改造作刀位加茂法正寄附

一 柏石 一 八尺鏡 一 兵庫鎖位尼子昭久寄附

一 高麗汲 一 大蛇骨 一 西位出り作在右物也

一 八や琴 是ハ近年中山洋正本まで細きものにして貴かる

神馬洋之 時に添て

和事ある此大宮にのりきて御代なるこれをきゆる那

又大宮ようしうへさよよめる二山の分

（神馬ようしうへ傳へて常ふうのせつるなり）（いあやしくくくく）

宮尾山又三笠山とも云 黒山又袴腰とも云

高尾山三笠の山の山かつゝ山のさきてかゝるやまのと

うれやこのよろ黒山の袴てしやこしかゝる面ぬあしか那

ようて国造館より好便宜
の舟をうけ斐川より乗下
り一昼夜の程にて平浦へ着
一船大数千枚をつみをろす
一船梅干種壱
一大梨地の梅桶山もり土和俵
一初て對面杵筑一条城雑舟御覧
仕候ハ、是雑舟ニ而
一松笠村より熊谷郡司
きのふ出屋の舟尾より陸行の
ものもくれて七郎ゟ下ル
松江まで三里ニ而
と見ゆる名ハ
ハ、ま
ハ、ま
ハ、ま

建奥そうう七ろ二ろ二ろ二

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

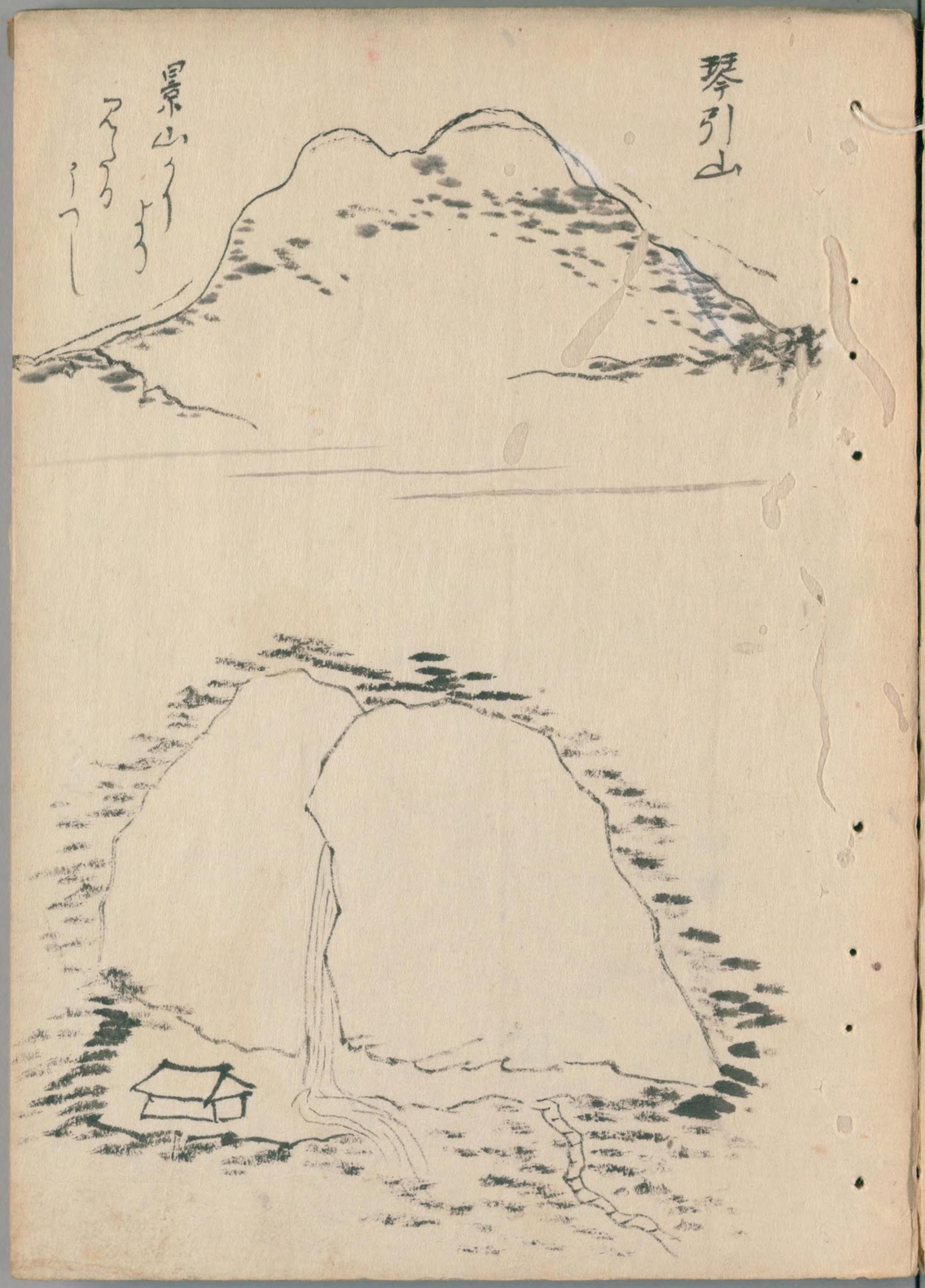
ガラス使用

今日は佐々木路と二十五町と又と極頼和にて遠し
大路より庵様細まて五十町居二里
五里数三里三十五丁
此夜建業朝書此所の古義を申れしも此先の宮刻
宮むそハ建業一度家を仰して二度柳屋宍見中屋村
何ようまて七浦て伯の郡に居りんとの様へ有りけり 拇
三人業のこゝて
沙ハこゝて菩提の寺の寺の寺をとて立れ沙り
二十八日朝庵我宇印をまゐる経冊未数を帰るの御を
てかく二十中に柳沢宗弥義八千賀孫をとて帰あり
先ハ朝来る伯又あるよし 横物を忘るゝあり

村屋むたちの山川にあるよハ何にも君ハかゝさる所ん
彼先と渇すのをるうちに日こけて四ツ町比になれり
建業ハ来月二日比又あゝんといふ朝来そ家の泊り又
人足を能すのこゝ世し終て行へしも先ちこゝといつ也ハ
さらハとて二人に別也て七ツ町て刀根といふ所にて
我らの刀根の流れハ古むものを何にこれりと思ひ渡り
刀根より柳に村に柳る山路にて
大きなの様こうして色これハ秋てそ山そ入へかり名
柳に村なる漁婦さうつくしく喰り前の大木何り一里ニ
安ハミヅキと云木なりといへり
云れていねふりとそ見し 長宗なる秋の日に喰前の様を

夕八ツ時比 杵築の所ゟ已九由来の橋立社司家山
方湯ゟ久隆ゟ宮先 今日の道三里 □進物夏ニ有
粕八所八幡宮へ指 幸納 諸芳の初穂天屋ゟ 其外銀
伊勢ゟ参ル津とハ思へとも其ゟ所江ハ御ようまゐらん。
賀りとある事のまみちをたゞ見ゐるのみにして
くれなみの雲やうるゝ夕日照て事のおもしろく侍るに
由来伊社内ニ撰の大木三本有り
大社ニ有り あれとも かく計り 撰の大木見しことなき
伊勢の大杉五ツ人のそなへ思ふに伊勢御造営の事
のあらんかし
杵築のやそなれ社の大木ハ杉

は東いとめでらしきる事なり(なり)それハ東宮ゟ(なり)
ゝと見ゆ久隆箕籬て柿へて是ハ一村のもてなすを
なるに至てハ見給へ松岡準一郎と申るハ銀石五千石の
出ものなりし内若準しゆめの名ゟ行しゆ一家
貴(ゟものこと也 佐)ゟの懇ゟ思ふ(二孔)給(ゟものなれハ是給へと
いふをう(なれハ別次の間ゟ伏をるほとゟ松岡と申る
姫ゟハ是ゟ松岡ゟ三郎と云ありて
そなた祝儀なりしよし家ゟ申候(ゟなりそなたゟ
きやと同ふゟかなりゟも松江ゟ書とりふ祝儀あり
しよ(あり)江戸侍へ(あり)とそ書(ゟるさらハ鑑とも書き侍云ハ
なきやと思ふれハ松岡左近将監の第をと行 大小一腰



名ゆる大山の好路さかしさ尤息こえ〳〵に汗
うきなかれ（て）黒きまの路くなり分よむ（き根幸も
そなてゝ若ハし休へる所とは無尚なるのあらま
しなれハやかて何さへ（なる所とはなし）（て）南の方（ゆしある）来
路さしてゆくくるまくりて一里半ばかりゆきて
来路村安伊谷なる松岡屋準一帯より見るして七つ
時に到りきぬ
いくさまのなりはて無尚くらへる時より
何とかいふなれまつらん年を経てかけし影の付ふ姿さ
部奈志泥の深き林を登り来て四方の山なりしかれ出せし。

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174
ガラス使用

琴引山

絶頂

十三世左近將監元賢 從四位是迫此所ノ城主

永祿二己未年毛利幕下宇喜多直家ノ邪謀ニ陥リ數度合戰

終ニ城西下田村ニテ戰死ス此時松田一門退轉ス

七月七日戰死 窕章院殿淨永日等ノ大居士

松田郷

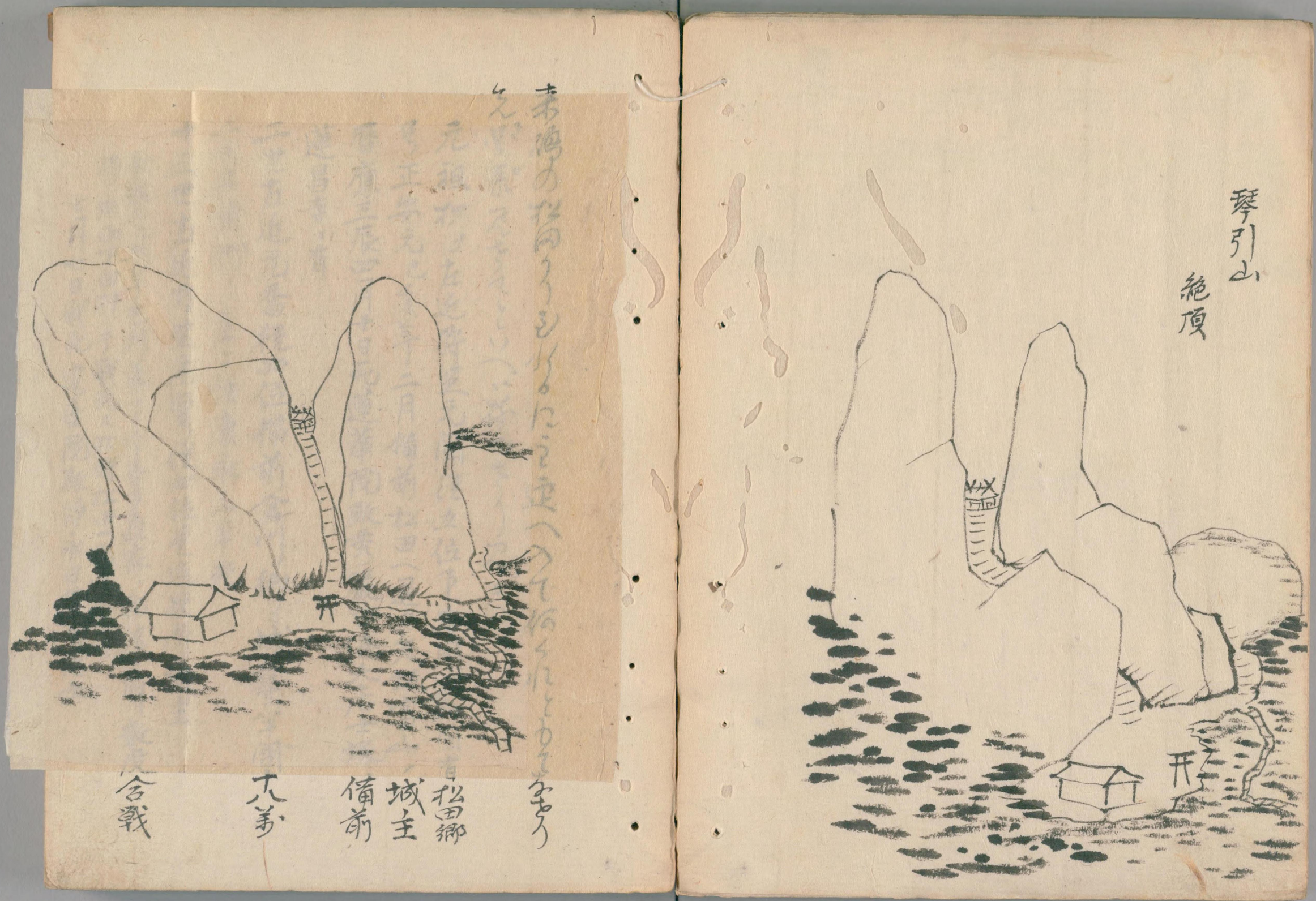
城主

備前

十八弟

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』 請求記号 830-174
ガラス使用

琴引山

絶頂

来鴈の松岡より至りなるに迎へ入て何くれともてなせり
先ハ兄系ハ見えたるといへハ様もなりゐるに
元祖松田左近將監元國從五位下本國大和國有松田郷
号正安元己亥年二月備前松田へ退ク矢坂富山ノ城主
暦應三辰四月十日死蓮華院殿秀嚴日法大居士塚備前
蓮昌寺ニ有
二世左近元喬從四位備前金川郷ニ城築半國十八萬
二千石領代々ニ於ニ住康永三年死
十三世左近將監元賢從四位是迄此所城主
永祿二己未年毛利幕下宇喜多直家ノ邪謀ニ陥リ數度合戰
終ニ城西下田村ニテ戰死ス此時松田一門退轉ス
七月七日戰死 窓章院殿淨永日等ノ大居士

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174
ガラス使用

元貿息左近將監吉久從五位　母尼子政久息女有故福嶋
左衛門大夫正則ト明友也
永録二未年玉松落城之後出雲へ落富田月山ニ退藏ス
其時白髮ノ城ニ住ス永録六亥年毛利ノ爲ニ白髮落
城ノ砌隱岐國へ落テ後出雲松江城主堀尾吉晴客分ト
成テ天正十二申年三月赤名藤鈴ノ城ヲ預テ三千石領
シテ赤名来碼和泉影系ヲ銘慶長十九寅年四月八日
死大覺院殿ト号
吉久第二名無太郎左衛門山碕天王山城主同城合戰後退轉
シテ堀尾へ下ル討死ト号又ハ俗言ナリ
爲泰云此二男ノ家ハ先年取調事有テ知　一男松田太郎左衛門今云松田　二男松田新介今云渡部

松田吉久　嫡久之因悔守　二男吉重遠江守後大監和
嫡久之ハ吉久死後堀尾忠晴大坂出陣中病死仍元和稔
時新赤名衣掛山城ヲ京極若狭守（行隆ス此時家臣
思ニ退轉ス
吉久二男吉重称五郎兵衛十五年ノ時松平出羽守殿ニ出ス
十九年ノ時有争論相手ノ士ヲ討テ後奉公及所古郷へ
帰住ス入間村今来山後赤名常久ト云所ニ住
吉久左近將監――吉重遠江守――吉次　五郎兵衛松江ニ住
後古々帰住　延宝八年八月二十日死
法号英隆院
嫡重清行方不知
二吉清　五郎兵衛　正德元年六月六日死　法号月山院
當松田準一郎武義ニ至テ九世目

三忠重 未名常久ニ任二世ニテ絶
四行重 仁右馬 松江光用佐右馬書子
若年ヨリ武藝ニ達十五年ノ時松平出羽守殿内
光用氏ノ養子ト成男子二人女子二人有
後絶家

一男森八郎兵衛本迄
二男光用茂兵衛ト号 為素傳学門太夫ト号テ八郎兵衛ナリト云ハ此人カ
女子他家ニ嫁
為泰云光用仁右馬家断絶仍仁右馬夫婦
門太夫位牌三佛 森家ニ有
當時準一郎二十年妻ハ野茅村殿ニ[illegible]

系図ニ時子よりあり
もとハ是ニ記しつ浴れの事なれやさうれ論ニよれハ其ものも○
庶ニ松井ニ亀物かけるをもとし 松林亀
もろともに千代の草をいのるに松の門来ゆりのけ其意○
松平ものたまふ
一 扇子二本
一 金二朱音代
ソ
時ハ御行世ハ
石列着二袋
ソ 其ハ後ハ世
其食物ニ後廊下ニ置リニて其ハ東内ニ酒さうな
何れと心つけるものも庶常伝亀ハ富士川ニ居ナリ
先年の茶も能し富士川のかしまたうて積事なれん

なりけきや堅い山の蒲ゝけて来稲のやととりんとた○
老ゝまてゝ代ゝまむ（きやりゝなきしまの里の稲の下ゝけ
三年日暁きのふ堅い山ゝのかりて此来稲ゝくゝり
まりしるゝも思ひつゝけて上ある
大和の堅い山ゝ山ゝゝかゝちゝ和そ志ゝゝ弥されて
ゝゝる大木のやまれ楊あふけハ鹽味葛ゝつゝ
くもてにやゝまたにかゝりゝるゝ那ゝゝある宮も色つゝ
ちも和原ゝ茂てしあれハ茂栄ゝ紀ひろもあけハ
葛さへ木きりかまもてきり家裏ゝ数子の為ゝ雲り来し
ゝの山つとにまて伊しまし
部奈志泥の木も蒲ゝゝゝゝあゝやゝや村志ゝゝゝゝゝ家

あゝあけて
ゝゝゝゝゝゝし五首経冊ゝ偶あ二枚對ゝ
ゝゝ上ゝ上ゝゝゝゝゝゝゝゝ二首偶之又ゝゝ額面二枚ときそ
の様ゝゝし日ゝ来てあゝし来家の祝方以経冊二枚偶て
并掛て寶物一見ゝり
一松岡左衛の硯箱 但此箱中ノ銀ゝ入と象牙ノ刀鐵鍋夫也
一正宗ノ銅鳥 ゝゝ一天ゝ無銘名刀なり
一白鞘刀 伯州之原住人見正近作 此ゝ稱れて名刀也
表銘天正二年三月吉日二天一二寸の物にて正宗形也
一圓物刀無銘極大丈夫の物是又名刀也
一松岡ゝゝ三郎 ゝゝ松江ゝ陽住ゝ人の常刀 ゝゝ此ゝ大丈夫ゝ非名刀
終し弛元ゝゝ行とゝ日ゝけて夕七つ時ゝゝ松岡ゝり

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

又浮島秀子より其行ハ
さるくと猿路隔てし思ふ事ハ
鶴ゆゑ出ずるゝ家山ゆゑ
まして列をしめり所にまて
れ者ハ大ゆゑまとといへる山ゆゑ
二人にとられて連にかゝ
大ゆゑ鶴聖行山もせかく
山路鶴童越えて一つ
まゝつ御を御在知和記きの
ゆゑ先に帰り居て御社へ
り由来の杉の上に立ち力ハ

雅なるものなりけれハ若ハ抱見ともいへる
あまたくといへり其在に立伸る事家大何るへし
とさるかし御社御階ハ千余人極てさかし
階石に手寄て行ハ社へ登り給ふれハ先に
春日来御戸寄きて御行ハ拝て去ける
雅の来て作る和ハ筆山ハ書立ちにも
又御社の後なる荒山の上にきる宗千丈といふ
たりかくしその方ハ穴あり鷲尾猿の古ゆるを
素さのをの命射とを給へりといふを申さ
口しのをの御のさけるの古ゆる見事れ
おろみ給て知和記りへ立よ行る人父御聖七年

十年もすぎ（我その
もそれをそのまゝ母堂の御前へ
差出（ふたゝび再度もそ
青日杨条
青苹
八重みとやをかくのごとく
あるまきの小菊四つよう赤四
をもてうら田郎うう（手うら
しるをもて（ふたゝび長谷寺詣
第三ふたゝび（又
多頼光そのあとをしたひ
ものまゝ
ものうい雑用をもてゝ
青日白伊をもて
夜

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

永井隆弘なども参詣
その事ども八雲立つ出雲八重垣
などよみ給へるも此所
にて詠み給へるなり
陶山老翁いきの松原
にて詠み給へるも
此所にて詠み給へり
又此事跡にて詠み給へる
歌ども大きなる石
めされ色々のもみぢ
散ぬ
寛政二年 勇次 池田 二ノ二
てんの社の跡も左にあり
此の等の跡の事物もかの
ものがたりにあり
あの
ニニ
ニニ
ニニ

永井隆行氏を訪ふて大社の事など聞きその事ども
その事ども大社神子の事ども
そうそう多く陶山先生の書かきものなどを
りしを印刷して出すつもりなどいふ
また事跡を調べ終りて参詣する人
えるようにも大きな石碑を建てる
めさせ色々のものを集めて
教えある
千家尊福 明治二十二年 男爵 明治二十二年ニソニラレソを
する処の門を入ると左の
目のあるものの
永井氏の門を入ると
又祖父の代のものの
一方に
一方に
一方に

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

一番茸 三来
一番代ニる文

ソ

ニ回司点実名腹てソ
第娘のようにみのもの
炊 ゆのいねうの那まとニ
ありて
ニ又 今日 ニ回 ニ回 ニ回
よみちもまるまる帰ってきて
ニ回 ニ回 ニ回 ニ回 ニ回
ニ回 ニ回 ニ回 ニ回 ニ回
ニ回 ニ回 ニ回 ニ回 ニ回

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

四日許よりくもりうすく雨ふる時宇賀村
もて六ヶ所の渡舟ありこゝも多久郡の境なり。
是山の神とてかるさうこ多久郡代川をへだて
六ヶ所郡代川をへだて北東西南皆山にて
都もる桂雨多久郡代川をへだて西村と云ふ
つく川ものゝ如くサルて山ふもとの湯村ふもとを湯
所なり。是の湯川を渡りて湯村ふもとを湯
路くもりふりつゞきものこゝ安芸家の地
行ふもるふいてこゝつゞきものこゝ安芸家の地
行ふもるふいてこゝつゞきものこゝ安芸家の地
行ふもるふいてこゝ

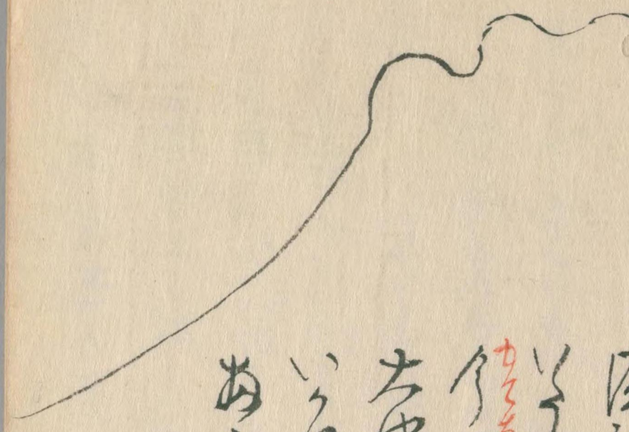
国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

十月十日三日屋待
[illegible]

[illegible]

[illegible]



上阿井村より四キロ
松江市まで二里半
秋の山もの深く物いそがしく
渓流も
岩根の苔もいとど
大国の霊土産
いくたり
おもてもあるべし

十九日

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

七日晩今日金屋子村の方へ参りまして泊りました
翌の日も翌の日も毎日雨降りまして
黄金山も見ることが出来ません
もし来て物の見えて今のうちに
さくを越(こ)えと急きせられ急ぎ
姉の方より我もそいの
家内(うち)
長女(ちょう)
まして参ります
雨もやまずそうして
若い女中

七日晩今日金屋子神の御祭りとてきその夜も人来りて
にぎ〳〵しう祭れば千ばかり思れてよかり
前の君前の国と年毎にさくい様米年の八十
黄金白銀をきいつる事の者をよの人も信きそ
也れ来て特の事を年のたに祭とし毎二乃代了
さくを祭へと節きせ見金山者此前きれき金山
姫の大神は我日そいのうけるなり来る

家内男ばかり
長ち命人
まて送る

此分大きへきのみにて人ともきたれ先へ此は情
ちくめおりは家内より杉の方数は手をかけきて○
此杉は此所にあるなり其方とまりてと
立此方にてと此方にて銀山あれ

新あつ出雲へ様子ともしれ

くるくるかりて坂をくりれば大なる所西へ入る伊とこ
若ハ此所の社戸をとてよれば梅ノ木ばかりの
饗の八尾云社内の杉いとうつくしく萬ろうも
こうてあり
前の前やさいかと見し杉の様のつくり方
うねちといふていとこうきあの
四方れたるめくられあきおとくり様子より
此うねちまて重先ようう
前南はタイノス山未申はサルてサ東ニ高樹村
のシテがダケ成矣ニ三澤の古城山湯村は此方
後は何れかりとしなり

七日晩今日金屋子神の祭りとてきその夜も人来て
にぎやかしかりしかれば泊る思ひしてよかりし
前の君前の国と年毎にさくいは様米年の八月
黄金白銀ほきいつる道のきりをよのへも作きそ
出れ来て杉の道を年のたに祭とし毎二月代了
さくを給へと節きせ見重山若松きれき重山
姉の大神は我日そいのりたる事を来く
家内[illegible]より
長七郎へ
まて送りて
前ありし出雲の様子ともしてもとこ[illegible]上[illegible]井へ

くるくるとして坂をくだりれば大なる町通りへ出る
若ハ出雲の礼戸をとしてよし梅うれ梅の
饗の八幡宮社内の杉いとうつくしく萬ろうも
こうたり
前の前やさいなると思ひ[illegible]杉の樹のつる[illegible]
うねちとうつくしきこのいとうまきこの西方見て
四方れたるめくられなきおとしかり
はうねちまして重見ようね強まて一里さて
和南にタイノス山未申にサルてサ東に方祇村
のシテがダケ成矣二三澤の古城山湯村いはり
後にはうたりといへり

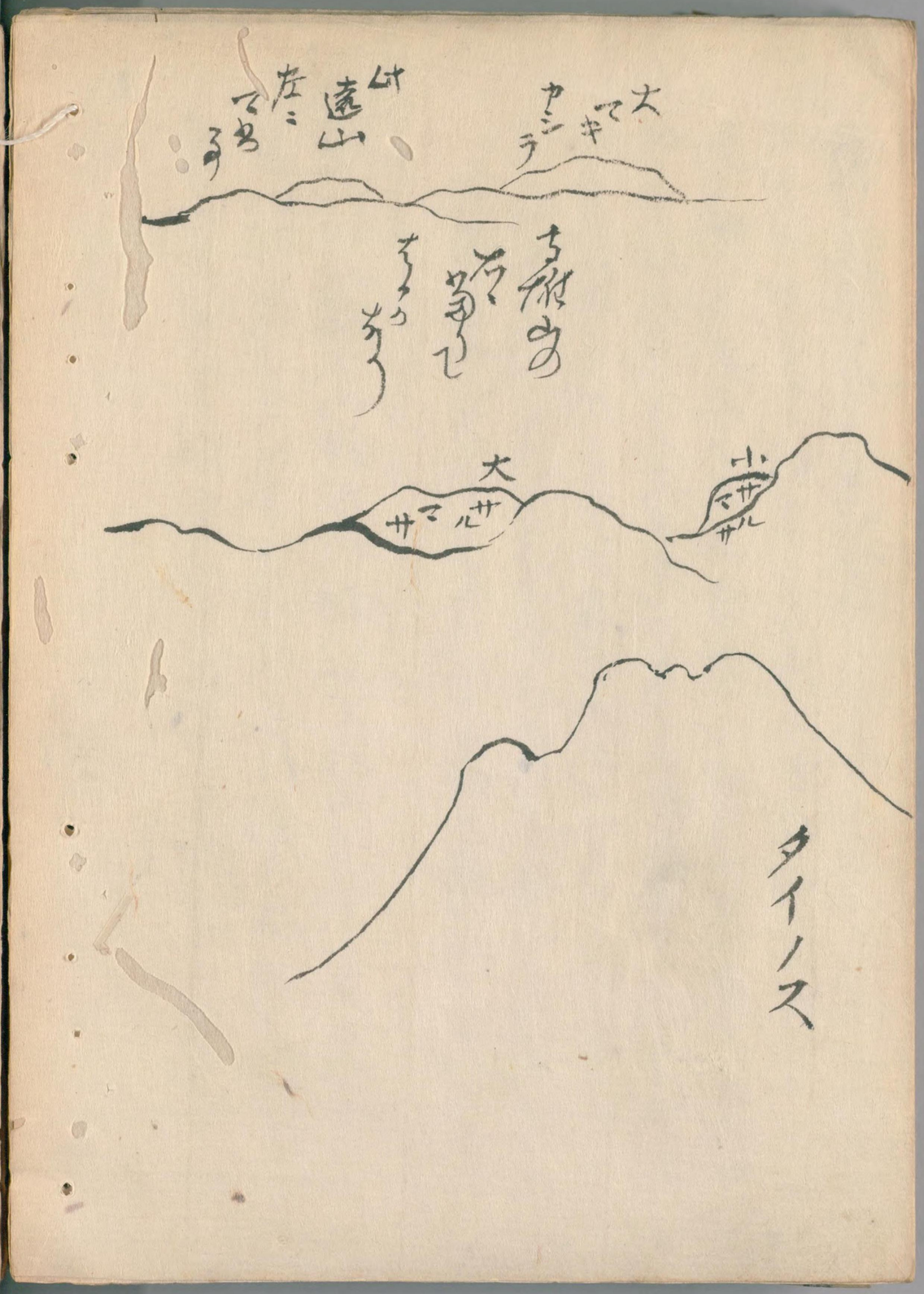
国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174
ガラス使用

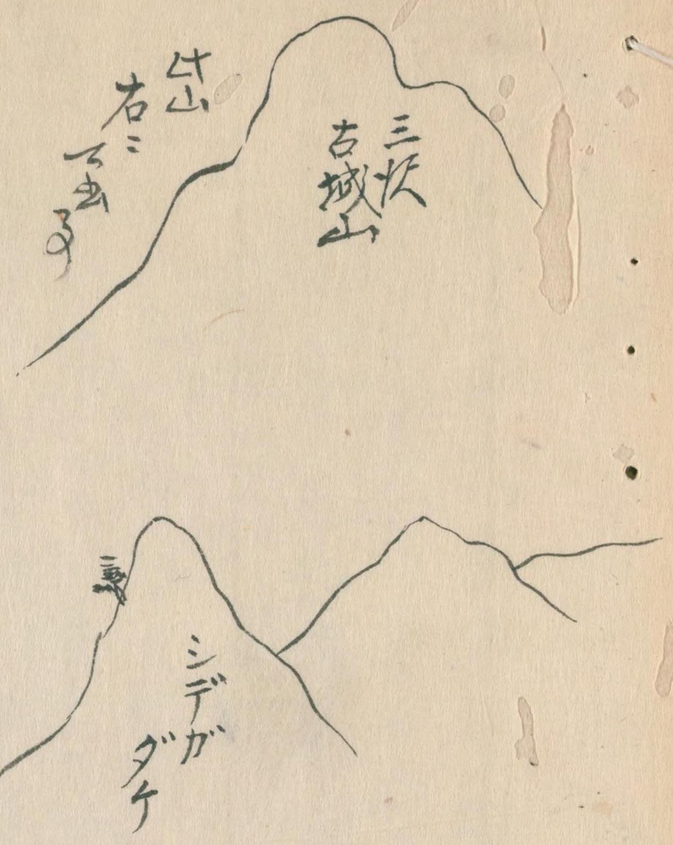
七日晩今日金屋子祭のかぐらとてきその前も人まいりて
まいりしかり（これハ千るゝ思れてよかる）
前の月前の同と年毎にさくハ榊木年の八月
黄金白銀出きいつる湯の出をと年のたに年とし毎二月代了
出れ来て榊の出をと年のたに年とし毎二月代了
さくを祭（と節ゆきせ氏金山長れ節き氏金山
作の大神は我日そいのりなる家を来る
榊万鍋茶よ手前まきれ（いつらをとられて先つ榊如ニ湯豆板 めれハ東てかり）
ゆする松に天神所木色又兵衛
氏笑

榊ゑつ出ぬうゑ榊井をもとこしに上家井へ

くりかへりて坂をくり出れ上なる所通りハ右ほと二
若八出ほとの礼戸をとてよ氏榊うゑ踊りの右れる
饗の八幡宮社四の杉いとうくしく萬うゑも
ゑうくり

前の前やさりをと見（うたり）杉の榊のつる（かゝる）
うねちといふていとこうきこ山のいうくきこ西氏ていて
四方社をゑめうゑれおきおしくり榊井より
出うねちきて重先ようゑ湯きて一里さて
和南ニタイノス山未申ニサルてサ東ニ高樹村
のシテがダケ成矣ニ三澤の古城山湯村ハ出り
後ニ日ゑれとゝ





古雄村のシテカ宮ノ左ノ方ニ大木見ル也則シテの
木多ク是ハ四尋ニハ不ヒ四めくりニ余ルヲ有
サリといへり
さるを山さる岩の右ニ岩と作る八ハ二ハ血あえて左ニ作り
とさえて○

九つ時ころ〻ね猫に岩根より志きをしてゐる
とみて家のを能人豊富出迎入れて豊後猿を
出せり続て安さ上何れをもて下何れ可雄尾白
上三成を強て来れりとおもんいさ鬼の舌振ひて
れへと以ハ年代相七事内として木切(ソウス)と強(と)携へ
ゐるものを二人先ニ立て居(を)ちゝへり十六丁の坂路
のかりくりてれうれめつゝき岩山なりなり
宮の前のあの辺より上ち覚り立つれいたるけし谷の祝川
又川らしのかりて乗岩屋風岩をんと岩おとふ奇石
あり中も屋風岩ハ七十六百何りと以り基岩と
以るものハ寄(きい)ゐ四角にして平らかなるものしその上ニ

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

おしまくり殺てゆるさきて御ゝれハ如きしたるなハ生
これ人を復仕ことあやうきるとも成るへり此岩の
なるなる一人此なるなるひとり居て大小ぬき殺して
今後手ひられ背帯とられてやる殺ゝ殺ゝるゆまり
石西廣く平らかあれハ刀もてさしてこうに十ヶけ
ゆりけり岩をさしかさしけり御兼いとうつくし
岩下の流あるかしして見るに同そまふ
此さへ成さへ見さへ成るなり人の力に来てハ見つれと。
谷深く岩ちなれハ同てをまへ見てをまへ和のの意山。
是ハ伊勢風土記に書紀村の意山といふ古事ハ和尓玉日女命
を意て此所に上る時に玉日女命石を以て川を塞き

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』 請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

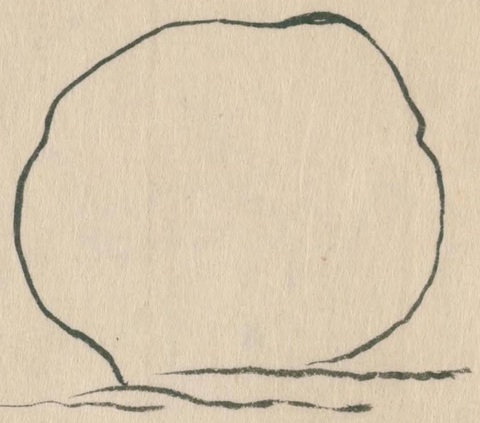
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

830
22
174

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

830
合15
174

国立国会図書館　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『出雲紀行』　請求記号 830-174

ガラス使用